



Title	内田百閒『冥途』における「私」：自己の写し身との関連について
Author(s)	古田，雄佑
Citation	阪大近代文学研究. 2008, 6, p. 34-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92652
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

内田百閒『冥途』における「私」

—自己の写し身との関連について—

古田 雄佑

Ⅰ、先行研究と問題の所在

内田百閒の『冥途』は、大正十一年二月に稲門堂書店から発行された処女小説集である。本書に収められた十八篇は、全て「私」を語り手としているが、舞台や登場人物はまちまちで、それぞれの作品に連続性は見られない。その一方で、「私」の揺れ動く心象を中心に描いている点、周囲の状況に「私」が不安を覚える様子などに共通点が見られる。本稿では、執筆時期の早い同題作品の改稿である「鳥」を除く十七篇に共通して見られる、出会った相手に「私」が引きつけられて離れ難さを感じる展開について検討を行う^①。そこで、まずは先行論で多く取り上げられてきた二つの作品を挙げ、この展開がどのようなものか紹介しておきたい。「木霊」では、目の前を歩く「女と子供」に対して「私」が離れ難さを感じている。離れ難さは、「私は頻りに家のことを思つてゐた。帰らなければ、家で子供が待つてゐると思ふのだけれど

も、どうしても私の前を歩いてゐる女と子供から離れて、後に返ることが出来なかった。」と、家で待つ子供と目の前の子供との対比によって強調され、「私」の葛藤を生んでいる。また、表題作の「冥途」では、父親らしい「男」が去った後を、「私」が涙ながらに追いつけようとする。不安や恐れ、人恋しさなど、「私」の移り行く心象が展開を支配すると考えられる『冥途』において、離れ難さを感じさせる存在は、極めて重要な役割を果たしていると言える。本稿では、これらの存在が「私」にそうした感情を抱かせる理由について検討を行う。そして、彼らの造形に見られる類型性を指摘する。「私」に離れ難さを感じさせる存在は、時に血縁者であり、時に女性であり、動物や無機物であることすらある^②。先行研究では、このうち、それぞれ一群を成す血縁者への離れ難さ、女性への離れ難さについての指摘が集中してきた。内田道雄氏は、「内田百閒の〈夢〉と〈私〉——『冥途』から「山高帽子」へ」^③の中で、『冥途』の十八篇を「私」の感情に

注目して次のように分類する。

一、血縁者との出会いを哀切感をこめて描き出したもの。

(件、道連、冥途)

二、女性存在にまつわる恐怖感を表出したもの。(花火、

尽頭子、木霊、蜥蜴、柳藻、疱瘡神、波止場)

三、師弟関係その他社会的関係への異和感をとらえたもの。

(山東京伝、流木、支那人)

四、獣と共在し、又はそれになりかわる恐怖を描いたもの。

(鳥、件、蜥蜴、短夜、白子、豹)

五、群衆の存在、及び超越的な存在と交じり合うことのない

安を描いたもの。(件、石畳、白子)

(傍線は引用者による。以下同じ)

氏の分類のうち、項目の二が恐怖感、三が異和感、四が恐怖、

五は不安、と比較的類似する感情が並んでいるのに対して、

項目一には質の異なる哀切感という感情が挙げられている。

氏は、項目一に分類した「冥途」を、「幽明を隔てた父親と

の一瞬の交情」の「切実かつ緊迫した交わりが見られる作

品だとする。また、「夏目漱石と内田百閒」^⑤では、「しみじ

みとした情感のこもる」「立ち去ってゆく父親を見送るあわ

い悲しみ」とも述べている。血縁者との出会いが、他の存在

との出会いとは異なるものとして捉えられているのである。

同様に、真杉秀樹氏は、『内田百閒の世界』^⑥で、「冥途」・「道

連」に、「亡き父親に寄せる、子の思慕という夢想」(二六頁)

や、「血縁への懐旧、更に生まれざる兄といった、未生以前の

血筋への遡及」(八二頁)を看取している。両氏の指摘に

その典型が見られるように、「冥途」・「道連」を読む上で、(血

縁)は欠かせぬキーワードのように取り上げられてきた。

先に挙げた内田氏の分類では恐怖を感じる側面が強調され

ているが、始めに「木霊」を挙げて見たように、「私」は女

性に対しても強い離れ難さを感じている。こうした離れ難さ

の意味は、当然ながら(血縁)への思慕とは異なる文脈で捉

えられてきた。井田望氏は、「私」が女性に引きつけられる

理由を次のように指摘している。

(前略) ここで「私」が捕らえたものとは、自分の原点

にある性的な欲望、本能的な悪とでも言うべきものだとい

うことが分かる。「私」は、(女)に対する欲望を自己

内奥の咎むべきものとして予感し、不安を感じつつづけて

いたのである。(内田百閒「花火」論——自己深部の(女)

への欲望の発見——)^⑦

氏は、「私」と「女」との繋がりをも、「自分の原点にある性的

な欲望」、「(女)に対する欲望」に見ている。また、酒井英

行氏は、『内田百閒(百鬼)の愉楽』^⑧の中で、「花火」を『夢

十夜』「第三夜」と比較して、次のように述べている。

この禁忌の愛欲を識閥下の罪として、「第三夜」をデフ

オルメしたものに「花火」がある。(中略) 百閒の独創

は、盲目殺しの罪を愛欲の罪に置換している点だけとい

えよう。『内田百閒（百鬼）の愉楽』「I」『冥途』覚書

九九（一〇〇頁）

ここでも、両者の繋がりに「私」の側の「愛欲」が看取されている。両氏のように、女性に引きつけられる理由を「私」の性的な欲望と絡めて捉えた先行研究は他にも見られる^{（5）}。しかし、これらの要素は出会いの場面に見られる一側面に過ぎない。例えば、「血縁」や「私」の欲望に執着の原因が求められる一方で、他の存在（例えば「流木」では、拾った蝦蟇口に激しい執着が向けられる）に対する離れ難さについては、ほとんど言及が見られない。それぞれの指摘は首肯できるにしても、『冥途』全体に見られる離れ難さの描写への目配りが不十分だったのではないか。また、「私」とこうした存在との出会いの場面に類型的な描写が見られることにも注意したい。例えば、「火花」では昔行き会った女性との出会いが、「道連」では「生まれなかつた兄」との出会いが中心に描かれている。それぞれの存在に「私」が抱く感情は大きく隔たっているはずだが、末尾の展開は非常に似通っている。

・ああ、あの女だつたと私が思ひ出す途端に、女がいきなり追つかけて来て、私のうなじに獅噛みついた。（中略）身を悶えながら、顔を振り向けて後を見ると、最早女もだれもゐなかつた。そののに、目に見えないものが私のうなじを掴み締めてゐて、私は身動きも出来ない。（「火花」）

・忘れられない昔の言葉を、私の声で道連が云ふのを聞いたら、苦しかつたその頃が懐しくて、私は思はず兄さんと云ひながら道連に取り縋らうとした。すると、今まで私と並んで歩いてゐた道連が、急にみなくなつてしまつた。それと同時に、私は自分のからだ俄に重くなつて、最早一足も動かれなかつた。（「道連」）

どちらから接触したかという違いはあるものの、相手の姿が消えること、体に重さだけが残り「私」が動けなくなるなど、両作品は多くの点で類似している。こうした類似は、それぞれの存在との出会いの意味に関わる重要な問題ではないだろうか。本稿では、こうした類型性に注目して「私」の感じる離れ難さを検討する。その上で、血縁者との出会い、女性との出会いを中心に様々な用例を挙げ、離れ難さを感じさせる様々な存在に共通する造形的な特徴を明らかにする。

II、孤独な状況がもたらす離れ難さ

『冥途』所収の作品では、「私」が不安を感じる場面が多出する。不安から逃れようとしながら成し得ず、ますます恐ろしい地点へ引き去られていく「私」の姿が、多くの作品に見て取れる。山口徹氏は、「私」の不安が果たす役割について次のように述べている。

『冥途』の基本主題は、近代的自我たろうとする（私）

による私探しということが出来る。得体のしれない強い不安感や脅えにさらされながら探究される(私)という個人の心の問題こそが『冥途』を特徴づける。(『冥途』にさすらう言葉)⁽⁹⁾

また、桜井竜丸氏は、同じく『冥途』から感じ取られる雰囲気を次のように指摘する。

『冥途』所収の十八の短篇はそのほとんどがこうした漠然としたとりとめもない状況に理由もなく投げ出されてある心の不安なる状態を基調としている。(内田百閒論覚書——『冥途の周辺』——)⁽¹⁰⁾

「私」の不安を作品の基調として捉える視座それ自体は首肯できる。しかし、両氏の指摘が「私」の不安を一元的なものとして捉えているところには検討すべき問題があるように思われる。『冥途』には、様々な存在との(関わり)によつて喚起される不安と、孤独な状況に置かれたことで生じる不安の二種類が現れている。これらを一元的に捉えてしまえば、「私」が様々な存在に離れ難さを感じる原因と、不安とがどのように関わっているのかは見えてこない。ここでは、まず、「私」の不安をその原因から分類することにより、対照的な二種類の不安を指摘したい。

前者の不安が典型的に現れた例として次に引用する「花火」では、「女」との過去の関わりが明らかになった途端に、強い不安が生じている。

私は、不意に足が竦んで、水を浴びた様な気持がした。私はこの襟足を見た事があつた。十年昔だか二十年昔だかわからない、どこかの辻でこの女に行き会い、振り返つてこの白い襟足を見た事があつた。ああ、あの女だつたと私が思ひ出す途端に、女がいきなり追つかけて来て、私のうなじに獅噛みついた。(花火)

「花火」では、「この陰気な女と一緒に待つて、碌な事はない様な気がし出した」「段段息苦しくなつて、もう帰り度いと思つた」というように、「女」に対する理由のはつきりしない不安が語られている。なぜだか分からないが付いていきたくない、何か大変なことが起こる予感がする——相手との過去の関わりが生むこうした不安は、多くの作品で重要な役割を果たしている。

だが『冥途』には、これとは対照的な特徴を持つ、孤独な状況に置かれたことで生じる不安がしばしば見られる。例えば「尽頭子」では、同席していた「女」や「先生の弟」が席を外した後、一人取り残された「私」が寂しさを感じている。

それから、その男の後を追ふやうにして、女もまた二階に上がつてしまつた。私はほつとして溜息を吐いた。それから起ち上がつて、ふらふらと縁側の方に出て行つた。(中略)大分暗くなつてゐて、遠くの方はもう見えなない。淋しく物悲しくなつてしまつた。(「尽頭子」)

これら二種類の不安を同一のものとして捉え、それを『冥途』

全体の雰囲気まで敷衍することは適切であるまい。本稿では、二つの不安を区別し、とりわけ後者に着目することで、孤独がもたらす不安の感情が〈関わり〉を持つ存在への離れ難さに繋がる用例が見られることを指摘する。

「支那人」には、「私」と〈関わり〉を持つ存在との繋がりが端的に現れている。次の箇所では、周囲の人々がいなくなり一人取り残された状況で、寂しくなり「家へ帰りたい」と考える「私」の様子が描かれている。

さつき迄、そこらに一ぱいに居た船は、みんな無くなつてしまひ、金魚に翼の生えた様な鳥が群れをなして飛び廻つてゐた。私は次第に悲しくなつて来た。淋しいから、家へ帰りたいと思つた。（支那人）

孤独な状況に置かれた「私」が、寂しさを感じ、〈家〉という拠り所を求めている。このように孤独な状況が「私」の寂しさを生む展開は、次に挙げる用例にも見ることが出来る。

・私が当惑してうろろしてゐる内に、汽車は出てしまつた。目の前に汽車がなくなつたら、私は俄に淋しく心細くなつて、ぼろぼろと涙をこぼして泣いてゐた。（波止場）

・そんな事をしてゐるうちに、たうとうみんな起つて行つてしまつて、腰掛にゐるのは私一人きりになつた。淋しくて非常に恐ろしくなつて来た。（白子）

これらの例でも、孤独な状況や寂しい情景の中に置かれた

「私」が、寂しさを感じ、不安に苛まれている様子がうかがえる。

不安に脅かされた「私」は、様々な存在との〈関わり〉に引きつけられていく。それは否応なく「私」を引き去る恐ろしさを持つものである一方で、孤独な状況に置かれた「私」の頼りとなるものでもある。「山東京伝」には、孤独な状況にある「私」が〈関わり〉に引きつけられる様子が見やすい形で現れている。

私は、世の中に、妻子も、親も、兄弟もなく、一人ぼつちでゐた様である。私は山東京伝だけを頼りにし、又崇拜して書生になつた。（山東京伝）

天涯孤独の身である「私」は、山東京伝を唯一の「頼り」として書生となる。「私」は、「兎も角も、かうして山東京伝の傍に居られるのが、うれしいと思」い、山東京伝に畏敬の念を覚える。次の客が来たと思ひ、山東京伝の前を離れて玄関に出た場面では、孤独な状況が「私」に寂しさを感じさせている。

玄関には何人も居ない。だれか来て帰つた後の様な気がする。その為に、あたりが非常に淋しくて、そこに起つてゐられない。私はすぐに奥の座敷へ戻つた。（山東京伝）

座敷に戻つた「私」は、そこにいる山東京伝の顔を見て、「俄に心の底が暖かくな」るのを覚える。やがて、些細な失策か

ら山東京伝の下を追い出された「私」は、「当惑してゐる」たごたした心持を、どこへ持つて行つて、片づける事も出来ずに、「泪を」ばいに流して、「泣く」。こうした描写から、「世の中に、妻子も、親も、兄弟もな」い孤独な状況に置かれた「私」が、「頼り」にできる存在として、山東京伝を抛り所としてゐることが見て取れる。

先行研究で「血縁」への思慕という側面が強調されてきた「道連」や「冥途」でも、思慕を深めていく過程には、孤独な状況によつてもたらされる「私」の不安が関わっている。「生まれなかつた兄」の登場する「道連」では、「私」と深い関わりを持つ兄が、関わりを持たず頼りにならない他者と対比されている。作品の前半、「人の通らぬ道」を歩く「私」は、頼りにできる存在を求めて、「山裾らしい辺り」や「そんなに遠くない所」に光る「灯」を目で追つてゐる。

も一つ向うの此の山裾らしい辺りに、灯りが二つ三つ風にふるへてちらちらと光つてゐる。さうかと思ふとまた、そんなに遠くない所にも、あひだを置いた小さな灯が、雪の様にちらりちらりと光つてゐる。けれどもそこらに見える灯は、少しも私の便りにならない。みんな私によそよそしく光つてゐた。(「道連」)

「私」が、孤独な状況に不安を感じ、無意識に拠り所を求めている様子が見て取れる。しかし、「よそよそしく」「便りにならない」「灯」は、「私」の孤独を癒すものとはならない。

道連が正体を明かす次の場面では、「灯」が他者の象徴として用いられ、兄と「私」の「関わり」を強調する役割を担つている。

「向うの方に灯りが見えるぢやないか」と私の方から続けて云つた。／「うん」と道連が同じ様な低い声で答へた。／「あれは人の家の灯だらう」／「あれは他人の家の灯さ、栄さん、己はお前さんの兄だよ」と道連が云つた。(「道連」)

道連の男は、それまで正体を明かしてこなかった。そのため、「私」は道連のことを「無気味な男」と感じ、「一人の時と同じ様に歩い」てきた。しかし、この場面では、男は「私」が目で追つていた「灯」を「他人の家の灯」と切り捨て、自分が「私」の兄だと名乗っている。「私」は、恐ろしく感じながらも、次第に自らと深い「関わり」を持つ兄に引きつけられていく。その過程にも、兄と「灯」の対比が指摘できる。

さつき向うの山裾らしい辺りに見えてゐた灯は、消えたんだか隠れたんだか、みんな無くなつてしまつた。私は次第に恐ろしくて堪らなくなつた。道連の足音を何時とはなしに頼りにして、道の延びてゐる方へ、ただ当てもなく歩いて行つた。(「道連」)

それまで見えていた「他人の家の灯」が姿を消し、「私」は道連の足音を頼りにし始める。これを契機に「私」は兄に接近する。そしてそれは「思はず兄さんと云ひながら道連に取

り縫らうと」する末尾の展開へと繋がっている。「道連」では、繰り返される対比により、「私」の孤独な状況と、抛り所としての兄の存在が強調されている。孤独な状況下で「私」が抛り所を求める心理が、兄に接近する契機となっていることに注意しておきたい。

このように、不安が離れ難さと呼び起こす様子は、「冥途」にも指摘できる。冒頭、孤独な状況に置かれた「私」は人恋しさを感じている。

私は、一ぜんめし屋の白ら白らした腰掛に、腰を掛けてゐた。(中略)ただ何となく、人のなつかしさが身に沁むやうな心持であつた。卓子の上にはなんにも乗つてゐない。淋しい板の光りが私の顔を冷たくする。(「冥途」)

ここでは、寂しい状況を強調する「白ら白らした腰掛」という表現に注目したい。他の作品を参照すると、「白い」「白けた」といった表現は、孤独な状況に対して多く用いられている。

・私は、白けた座敷の中に這入つて、私の膳についた。辺りに、自分の影が散る様な心持がして、気になつて仕方がない。それに、広い座敷の中に、私と山東京伝の外、誰もゐない。(「山東京伝」)

・内に這入つたら、すぐに座敷へ通された。馬鹿に広い座敷で、矢張り何となく白けてゐる。その座敷の真中に、たつた一人だけで坐つてゐるのは、あんまり気持がよく

ない。(「尽頭子」)

・石畳は非常に長かつた。その長い白い石畳の上を、私の外誰も歩いてゐない。私は足もとが、がくがくする様な気がした。(「石畳」)

「冥途」の場合でも、「白ら白らした腰掛」は、「私」の「人のなつかしさが身に沁むやうな心持」と繋がっており、孤独な状況を強調している。

孤独な状況に置かれて一人きりでいる「私」に対して、父親は「四五人一連れの客」の中の一人として登場する。父親が「私」の求める人の温かみの輪の中にいることは、従来ほとんど注目されてこなかった。それは、この作品が《血縁》への思慕という枠組みで捉えられてきたために他ならない。しかし、父親が人と人との交わりの中において一対一の対峙となつていないことは、「私」の感じる思慕の意味を読む上で、見逃すことはできない。男が父親だと気付く以前の場面では、「しつとりした、しめやかな団欒」の中にいる父親達の様子が「私」の目を通して繰り返し描かれている。

・私の隣の腰掛に、四五人一連れの客が、何か食つてゐた。沈んだやうな声で、面白さうに話しあつて、時時静かに笑つた。

・隣の一連れもまた外の事を何だかいろいろ話し合つてゐる。さうして時時静かに笑ふ。

・通つてしまふと、隣りにまた、ぼつりぼつりと話し出す。

けれども、矢張り、私には、様子も言葉もはつきりしない。しかし、しつとりした、しめやかな團欒を私は羨ましく思ふ。(以上全て「冥途」)

「四五人一連れの客」は、寂しい状況にあつてなお「しめやかな團欒」の中にいる。彼らと、抛り所のない孤独を抱える「私」との対比は、次に挙げる箇所、端的に現れている。

時時土手の上を通るものがある。時をさした様に来て、ぢきに行つてしまふ。その時は、非常に淋しい影を射して身動きも出来ない。みんな黙つてしまつて、隣りの連れは抱き合ふ様に、身を寄せてゐる。私は、一人だから、手を組み合はせ、足を竦めて、ぢつとしてゐる。(「冥途」)

「四五人一連れの客」と「私」が対比されることで、一人で寂しさに耐える「私」の孤独が浮き彫りにされている。父親をそれと認識する以前の場面で、「私」は、〈血縁〉よりも、むしろ孤独の中で「抱き合」える存在を求めて羨ましさを感じている。このことから、「冥途」が、「しつとりした、しめやかな團欒」の外にいる孤独な「私」が、「何だか見覚えのある様なつかしき」を感じて接近しようとする枠組みを持つことが指摘できる。

本章では、孤独な状況が「私」の不安を掻き立てること、〈関わり〉を持つ存在に対して「私」が離れ難さを感じる過程に、その不安が深く関わっていることを検討した。そうした存在は、血縁者や女性、動物や無機物など多岐にわたるも

の、出会いに至る展開には色濃い類型性が現れている。その中で、〈血縁〉は必ずしも決定的な役割を果たしているとは言えない。「私」の思慕を、血縁者へのそれと限定せず、孤独への不安という側面から捉えることにより、『冥途』全体を捉える視座の獲得に繋がるのではないかと思われる。

Ⅲ、「私」と「私」を引きつける存在との重なり

では、「私」を引きつける〈関わり〉はどのようなものとして描かれているだろうか。父親や兄、倅との〈血縁〉の繋がりは見やすいものだが、『冥途』には「私」と「私」を引きつける存在との関係が明示されない場合も多い。例えば、「柳藻」に登場する往来で出会つた「女の子」がなぜ「私」に媚態を示すのか、「支那人」においてなぜ支那人が親しげに話しかけてくるのか、不分明なまま「私」は相手に引きつけられていく。しかも、「私」は、初対面らしい存在に対しても、しばしば運命的な結び付きを感じ取る。「尽頭子」に登場する「女」と「私」は、「私」が「女」の家へ向かう道に不案内であることや対面した際の態度などから初対面であるらしく見える。にも関わらず、「旦那」のいる「女」のことを「私」は「私の女」と呼ぶ。そして、「私の女は二階で何をしてゐるのだらうかと思ひ出したら、又それが気になつて堪らない」と嫉妬の感情をあらわにしている。また、「柳

藻」では、初めて会ったらしい「女の子」に執着し、「これが本当の私の女だかどうか解らない」と迷いながらも自分のものにしようとする。こうした「本当の私の女」という運命的な響きを持つ語の背後には、どのような〈関わり〉を見ることが出来るだろうか。本章では、こうした存在と「私」の間に見られる〈関わり〉の内実について検討を行う。

「花火」は、親しげに寄り添う「女」との過去の出会い、つまり〈関わり〉がどのようなものであるかについてふれた数少ない作品の一つである^⑤。しかし、すれ違っただけという関わりの薄さと、「女」の見せる真摯な態度の間には大きなずれが感じられる。ここでは「花火」に見られるずれに着目することで〈関わり〉の持つ特徴を見ることにしたい。

「女」は「私を迎へに来た様」に振る舞い、「帰らう」とする「私」を度々引き止める。

・私はもう行くまいと思ひ出した。さう思つて女の方を見ると、女は涙をためた目でちつと私の方を見ながら黙つてゐる。私は引き込まれる様な氣持がして、女について行つた。

・すると女が私の前に跪いて、しくしく泣きながら私の顔を見た。／「もう土手は日がくれて真暗で御座います。どうかもう少し私の傍に居て下さいませ」と女が云つた。
・「土手は浪にさらはれてしまひました。もう御帰りになる道は御座いません」／さう云つてしまふと、俄に大き

な声を出して泣き始めた。さうして、顔を縁にすりつける様にうつ伏せになつて、肩の辺りを慄はせた。(以上全て「花火」)

また、涙する「女」を置いて帰ろうとする「私」を、「女」は「浮気者浮気者浮気者」となじり、うなじにしがみ付いてくる。「女」は過去の関係の深さを暗示する態度を繰り返して見せている。しかし、こうした「女」の態度は、「十年昔だか二十年昔だかわからない、どこかの辻でこの女に行き会い、振り返つてこの白い襟足を見た事があつた。」というだけの出会いに比べて、いささか唐突な感を受ける^⑥。出会いの際に振り返つたのは「私」の側であり、「女」は「私」を意識すらしていないようにも見える。かつて行き会つたきりの「女」が「私を迎へに来た」らしい親しげな様子で現れたことを、どのように理解するべきであらうか。

「女」は、女学生や職業婦人の身に付けるような紫の袴をはいて現れる。こうした若々しいイメージは、すれ違つて「十年昔だか二十年昔だかわからない」ほど年齢を重ねた「私」よりも二つか三つ年上らしい「女性」としては違和感を感じさせる。また、かつて「私」の覗いた襟足が「水水してゐて云ひやうもなく美しい」ものとされる一方で、「女」の外観は「紫の袴をはいた顔色の悪い女」、「顔も様子も陰気で色艶が悪い」と一貫して色あせたものであるように描かれている。印象に残る箇所だけが鮮やかに蘇り、その周囲が色あせるといふ描

かれ方は、古い記憶の蘇る様子を思わせる。このことから、「花火」に登場する「女」は、かつてすれ違った時のままの姿で現れた、「私」の記憶に沿う存在と見ることができないだろうか。「私」が「女」との出会いの記憶を蘇らせた途端に、「女」がいきなり追つかけて来て、私のうなじに獅噛みつい」てくる。「女」がすれ違った現実の「女」とイコールの存在として描かれていないことは、「女」が消え失せる次の箇所から読み取ることができる。

身を悶えながら、顔を振り向けて後を見ると、最早女もだれもゐなかつた。そののに、目に見えないものが私のうなじを掴み締めてゐて、私は身動きも出来ない。(「花火」)

「私」が「帰らうと思つて」振り返った動作は、「私」が「振り返つてこの白い襟足を見た」過去の動作と呼応する。かつて「女」の方を振り返つた「私」が、今「女」から逃れようとして彼方を振り返る。その行為をこそ「女」は、「浮気者」となじっているのである。ならば、右の引用で「私のうなじを掴み締め」る「目に見えないもの」とは、かつて「私」が「女」の襟足に絡みつかせた視線の反転した姿に他ならない。「女」は、かつてすれ違った他者としての「女」ではなく、「私」の行為を反映した、記憶の残滓・「私」の記憶に拠る存在として登場していると言える。右に引用した箇所では、「女」がその姿を失い「私」を押し包む圧迫感そのものとな

っているところに、ここで見た特徴的な出自が現れている。「私」を引きつける「見たことのある様な顔だ」という既視感、こうした「女」との〈関わり〉に由来している。

「木霊」に登場する「女」にも、同様の特徴を指摘することができる。「木霊」では、「この泣き声が思ひ出したくて、今までついて来た」という思い出せそうで思い出せない記憶が、「私」を「女」に引きつけている。もどかしい記憶は、自分の足音の「餌」を聞くことを契機として蘇る。

その前を通る時、自分の足音が微かに餌してゐるのを聞いて、私はふとこの道を通つた事があるのを思ひ出した。私の足音が、一足づつ踏む後から、追ひかける様に聞こえたのを思ひ出した。／「いいえ、私の足音です」とその時一しよに並んで歩いた女が云つた。さうだ、その道を歩いてゐるのだと気がついたら、私は不意に水を浴びた様な気がした。(「木霊」)

ここでも、「私」の行為が「女」に反映されていることに注意したい。「私」は、「女」の足音を「私の足音が、一足づつ踏む後から、追ひかける様に聞こえた」と、「私」の足音の「餌」だと感じている。題名にも暗示されているように、この「女」もまた「私」の反転した存在、響き合う木霊のような存在としての側面を持つと言える。

こうした彼らとの〈関わり〉を、次に「私」の孤独感という側面から見よう。先に、孤独な状況が「私」を彼らとの〈関

わり」に引きつけている様子を見ておいた。では、彼らへの接近によつて、「私」は不安を免れているだろうか。実は、〈関わり〉を持つ存在への接近は、「私」をしばしば一層深い孤独へと陥らせている。

「蜥蜴」では、当初おとなしく「私」に付いてきた「女」が、やがて本性を現し、異様な魅惑を見せる存在に変貌する。

私はまたそれが恐ろしくなつて、思はずあたりを見廻したら、何時の間にか見物人は誰もゐなくなつてしまつてゐた。広広とした棧敷に、座布団が彼方此方へかたまつた様になつて散らかつてゐるのが、非常に淋しかった。

（「蜥蜴」）

「女」は、「私」に「あなたはまだ本当のことを知らないのせう」と言い、「あたしがこれから教へて上げるわ」とささやく。両者の距離が縮まつていく中で、周囲の人々が消え失せ、「私」がより一層淋しさを覚える様子が見て取れる。

「柳藻」でも、「女の子」を追つていくうちに、「私」は次第に孤独な状況に陥っていく。

うねうねした道を風に吹かれて行くと、何時の間にか町が尽きてしまつて、妙な野原に出た。（中略）辺りになんにもなく、又、誰もゐない。ただ一本の松の樹の方へ婆と女の子が行く丈である。（「柳藻」）

「私」はいつしか人気がない「妙な野原」に迷い込んでゐる。やがて、「私」は「女の子」に追い付き手を握る。しかし、「女

の子」との接触は、「私」の孤独を癒すことには繋がない。

私は女の子の手を引いたまま、池の沖の方を見てゐた。

（中略）辺りになんにもなく又誰もゐない。私は一人ゐる様に淋しくて堪らなくなつた。（「柳藻」）

「私」は、「女の子」の手を引いていながら、「一人ゐる様な淋しさを感じている。「女の子」は、「私」の孤独を埋める無二の存在のように描かれながら、そうはならない。その理由はここで論じてきた〈関わり〉の内実を踏まえればすでに明らかだろ。孤独を感じた「私」は、自身の写し身とも言ふべき存在に接近していく。しかし、それは自分自身と抱き合うがごとき孤独な交わりに他ならない。仮初めの温かみと引き換えに、「私」が「賑やかな街」（「支那人」）や「牛窓の港の灯」（「花火」）、家で待つ「子供」（「木霊」）や「妻」（「流木」）から離れざるを得ない矛盾は、こうした出会いがもたらすものだと言える。

血縁者の登場する「冥途」や「道連」でも、自身と重なる要素を彼らの中に認めることによつて、「私」の思慕が掻き立てられていく様子が見て取れる。

「冥途」では、父親の語る思い出話を聞いた「私」が「何物かにもたれ掛かる様な心」を抱き、涙を流している。これは一見、かつての思い出話が「私」の涙を誘っているようにも見える。しかし、父親の語る話の内容は、子供への愛情や父性のこめられたものではない。むしろ、蜂を閉じ込めたビ

ードロの筒を子供（の頃の「私」）にせがまれ腹を立てて叩き割る、という父親らしからぬ姿がそこには現れている。父親は「私」に視線を向けてすらいらない。「ああ、その蜂は逃げてしまつたよ。大きな蜂だつた。ほんとに大きな蜂だつた」という語り口からうかがえるように、父の視線は我が子にではなく逃げた蜂に向けられているのである。では、この話のどこに「私」を涙させる要素があるのだろうか。

思い出話に登場する父親の行為を追うと、それが「私」の行為と相似形を成していることが指摘できる。蜂をつかまえた父親は、それを「机にのせて眺めながら考へてゐる」。そして、子供にせがまれたことで「つい腹を立て」、ビードロを叩き割つてしまう。これに対して、「隣の腰掛」の会話を聞き取つた「私」は、「何故だか氣にかかつて、聞き流してしまへないから考へてゐる」。そして、「その内に」「ふと腹が立つて来」る。さらに、割れたビードロの中から蜂が「浮き上がるやうに出て来」て「逃げてしま」うのに対して、「そろそろまた行かうか」と云つた声が「私の耳に浮いて出」た後に父親たちは去つていく。蜂を逃がした父親の空虚な思いは、父親に去られた「私」の「悲しみの源を忘れてゐる」空虚な悲しみとして反復される。こうした両者の呼応は、次に挙げる箇所にも現れる。

「前略」己はつい腹を立てた。ビードロの筒を持つて縁側へ出たら庭石に日が照つてゐた」／私は、日のあた

つてゐる舟の形をした庭石を、まざまざと見る様な氣がした。（冥途）

庭石を見たのは父親であるにも関わらず、「私」が父親の視点を借りて、その場面を追体験するかのような描写がされている。この同一化は、「私」が涙する直前の場面に置かれ、「私」の強烈な思慕の誘い水となっている。

「石で微塵に毀れて、蜂が、その中から、浮き上がるやうに出て来た。ああ、その蜂は逃げてしまつたよ。大きな蜂だつた。ほんとに大きな蜂だつた」／「お父様」と私は泣きながら呼んだ。（冥途）

反復される枠組みを踏まえれば、逃げてしまつた「大きな蜂」とは、去り行く父親の暗喩に他ならない。「ああ、その蜂は逃げてしまつたよ。」という父親の嘆息は、そのまま父親に去られた「私」の嘆息へと繋がっている。換言すれば、去り行く者を見送る悲哀への共感こそが、「私」の思慕を掻き立てているのである。

「道連」では、当初、道連の男が隣にしながら「私」は「一人の時と同じ様に歩い」ている。やがて、男が自分の兄であることが明らかになるにつれて、「私」の心中には、恐れと思慕の思いが生まれてくる。その過程にも、両者の重なり合う要素が重要な役割を果たしている。次の箇所には、兄と「私」の声がそっくりで区別が付かないという象徴的な描写が現れている。

「榮さん、己はお父さんの声がききたい。お父さんの声はお前さんの様な声かい」／「そんな事が自分でわかるものか」と云つてしまつて、私は自分の声が道連の声と同じ声なのにびつくりした。頭から水を浴びた様な気がした。(道連)

自分の声が兄の声と同じ声だということに気付いた「私」は、強い驚きを感じる。両者の声が入り交じる様子は、作中三度にわたつて繰り返され、次第に入り交じりの度合いが増している。そして、その都度「私」は兄との〈関わり〉に気付き、感情を揺り動かされていくのである。次に引用する二つ目の箇所では、単に二人が同じ声だという気付きに留まらず、自他の区別が曖昧になり始めている様子がうかがえる。

私は道連の声を聞いてゐるうちに、段段自分の声との境目がわからない様な気がして来た。すると涙が一どきに溢れ出た。／「兄さん」と私は云はうと思つた。(道連)
両者の入り交じりが深くなるにつれ当初の驚きは後退し、兄への思慕が前面に現れる。ここでは、両者の重なり合う要素への気付きが「私」の涙を誘っている。入り交じりによつて掻き立てられる思慕は、三度目の場面では更に強くなっている。

忘れられない昔の言葉を、私の声で道連が云ふのを聞いたら、苦しかったその頃が懐しくて、私は思はず兄さんと云ひながら道連に取り縋らうとした。(道連)

この場面になると、両者の境目はほとんど失われている。そして、兄のこの言葉を契機に、「私」は兄と共有していた「苦しかったその頃」の記憶を蘇らせることになる。

道連の云ふ事を聞いてゐるうちに、私は、何だか自分も何処かでこんな事を云つたことがある様に思はれた。さつきから聞いてゐた水音にも、何となく聞き覚えのある様な気がしてきた。(道連)

「私」は、かつて兄の立場で自分が「こんな事を云つたことがある」ことを思い出す。ここには、兄と「私」が立場を変えながら同じ場面を円環状に幾度も繰り返している、という過去がほのめかされている。ならば、「道連に取り縋らうとする」「私」の行為とは、同化への願望に他なるまい。「道連」の兄は、他者であると同時に、自身の写し身としての側面を持つている。それは位相をずらした「私」自身の姿とも言える。「私」は自分自身と抱き合いながら孤独を癒そうとし、しかもそれを成せずと同じ場面を繰り返す。そこには「私」の生の孤独が浮き彫りになっている。

IV、おわりに

『冥途』には、「私」が様々な存在に離れ難さを感じて引きつけられるというモチーフが頻出する。先行研究では、「冥途」や「道連」などに見られる血縁者への思慕が、それ以外

の存在に感じる離れ難さと分けて捉えられてきた。また、言及が血縁者や女性との出会いに偏り、その理由も異なるものとして解釈されてきた。そのため、このモチーフが『冥途』の全体にわたって論じられることはこれまでなかった。

本稿では、孤独な状況に置かれた「私」が〈関わり〉に引きつけられるという関係性に注目し、離れ難さを生む原因となる〈関わり〉の性質について検討を行った。「私」は、〈関わり〉を持つ存在の中に自身と重なり合う要素を見出すことによって感情を強く揺り動かされる。孤独な状況に置かれた「私」にとって、そうした〈関わり〉は換え難い拠り所のように写る。『冥途』において「私」が出会う様々な存在は、完全な他者ではなく、「私」自身の歪んだ写し身として現れているところに、その特徴がある。

こうした関係性を踏まえると、〈血縁〉の有無は両者の〈関わり〉を示す表象の一つであつても、他の存在との〈関わり〉と決定的に区別される特徴とは言えない。むしろ、「私」と初対面であるはずの存在の中にさえ「私」と重なり合う要素が現れるところにこそ、『冥途』に描かれた〈関わり〉の特徴を見るべきではないか。こうした視座に立ち、『冥途』の全体像を捉え直すことが今後の課題となる。

なお、昭和九年に刊行された『旅順入場式』¹⁴では、本稿で述べた関係性が大きく変化している。これらを百閒の作品史の中でどのように位置付けるかは、別稿に譲りたい。

注

(1) 十八篇ある『冥途』所収作品中、「鳥」には出会った相手に「私」が離れ難さを感じて引きつけられるモチーフが見られない。これは、明治四十三年三月に『校友会会誌』に発表された同題作品の改稿である「鳥」と、他の作品（大正二十十年の間に書かれた）との執筆時期のずれが関わっているのではないかと推測する。

(2) 本稿では、『冥途』所収の十八篇を、①血縁者との出会いを中心とする作品（「件」「道連」「冥途」）、②その他の男性との出会いを中心とする作品（「山東京伝」「支那人」）、③女性との出会いを中心とする作品（「花火」「尽頭子」「木霊」「蜥蜴」「柳藻」「短夜」「瘡瘡神」「白子」「波止場」）、④動物との出会いを中心とする作品（「豹」）、⑤物との出会いを中心とする作品（「石畳」「流木」）、⑥いずれにも属さない作品（「鳥」）に分類して論じた。

(3) 内田道雄「内田百閒の〈夢〉と〈私〉——『冥途』から「山帽子」へ」（『古典と現代』第四九号 一九八一年九月）

(4) 内田道雄「夏目漱石と内田百閒」（『国語と国文学』一九六五年七月号）

(5) 真杉秀樹 以文選書41『内田百閒の世界』（一九九三年十一月 教育出版センター）

(6) 井田望「内田百閒「花火」論——自己深部の〈女〉への欲望の発見——」（『日本文藝研究』第五十三巻第一号 二〇〇一年

六月

(7) 酒井英行『内田百閒「百鬼」の愉楽』(一九九三年九月 有精堂)

(8) 女性に引き付けられる理由を性的なものと絡めた先行論として、「私」の性的な視線に対する「罪悪感」を指摘する永井太郎氏の「花火」論——内田百閒における「私」のありかた——(『国語国文』六十七巻八号 一九九八年八月) などがある。また、異なる見解として、「(前略) 役割から見れば「女」は「私」を「迎へ」、死の迷宮の奥深くへと連れ導いていくという案内人ほどのものでしかない。」とする山口徹氏の『冥途』にさすらうことば」(『日本近代文学』第六三集 二〇〇〇年五月) や、「潜在的な女性恐怖」を指摘する富士川義之氏「百閒の女覚書」(『ユリイカ 詩と批評』一九八四年二月号) などがある。

(9) 山口徹『『冥途』にさすらう言葉』(『日本近代文学』第六十二集 二〇〇〇年五月)

(10) 桜井竜丸『内田百閒論覚書——『冥途』の周辺——』(『人文論究』一九七五年二月号)

(11) 冒頭「女を世話してくれる人があつたので、私は誰にも知れない様に内を出た」とあるのに加え、「人の一人も通つてゐない変な道を、随分長い間歩いて行つたら、その家の前に来た。」

という箇所から「私」が「女」の家に不案内であるように見える。また、「私」が「女」に対し気まずさを感じている点からも、「私」が「女」と初対面であると推測できる。

(12) 過去の関わりについて具体的にふれた作品は、血縁者と出会う「件」・「道連」・「冥途」を除けば、「花火」・「木霊」の二作品に限られる。その一方で、「昔、何かこの女にかかり合ひのあつた様な気もするけれど、何だか解らない」(「尽頭子」) や「一体この女は誰だつたのだらうと思つて、考へて見たけれど解らなかつた」(「蜥蜴」) など、過去の関わりが曖昧なまま終わる作品が『冥途』には多く見られる。

(13) 永井太郎氏は、「花火」論——内田百閒における「私」のありかた——(『国語国文』六十七巻八号 一九九八年八月) で、「記憶について、「私」と女の関係が、襟足を見ただけであり、それだけでは、「浮気者」の言葉に値しないため、不条理の印象を与える」と同様の問題を提起する。

(14) 『旅順入城式』(一九三四年二月 岩波書店)

【付記】内田百閒の作品は、すべて『内田百閒全集』(一九七九年 講談社) に拠る。また、旧字は適宜新字に改めた。

(ふるたゆうすけ／本学大学院博士後期課程)